

2021/01/10

ヨハネの福音書 講解メッセージ③②

『なぜ信じないのですか』 ヨハネ 10:18-42

## ■人は真実がわからない

「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」このみことばを聞いて、ユダヤ人たちの間にまた分裂が起こった。彼らのうちの多くの者が言った。「あれは悪霊につかれて気が狂っている。どうしてあなたがたは、あの人の言うことに耳を貸すのか。」ほかの者は言った。「これは悪霊につかれた人のことばではない。悪霊がどうして盲人の目をあけることができようか。」（ヨハネ 10:18-21）

イエス様は、「わたしは良い牧者であり、羊のためにいのちを捨てる。」「わたしがわたしのものを知っていて、わたしのものがわたしを知っているのは、父がわたしを知っていて、わたしが父を知っているのと同じだ。」と語られました。このことで、ユダヤ人の間に、イエス様が悪霊につかれているか、分裂が起こりました。ユダヤ人が分裂したのは、イエス様に非があるのでしょうか。イエス様の配慮が足りなかったせいなのでしょうか。

この分裂が起こった問題点は、私たちの物差しにあります。私たちは、同じ現象に遭遇しても、一人一人その解釈は異なります。私たちの仕組みでは、真実を認識できないのです。たとえば、神は永遠であると言われても、私たちの認識能力では永遠が認識できません。人は、自分が経験できること以外は認識できないからです。

人間は、死という有限性のメガネをかけているようなものです。これは、神のいのちを、死によってさえぎり、否定するメガネです。自分のいのちの土台である神が見えませんから、私たちに見えているのは表面のことだけで、永遠も真実も見えません。だから、現象を自分で勝手に解釈するしかないのです。それなのに、私たちは自分が認識していることが真実だと思い込んでいます。これが問題なのです。

真実を知るには、真実を知っている人に聞くしかありません。それは神です。ところが、自分の認識が真実だと思っていると、自分の認識と神の言葉とが異なった時、人は神のことばに文句をつけてしまいます。そうではなく、自分には真実が認識できないことを認め、神の言葉を信じるべきです。これが罪との戦いです。罪とは不信仰です。私たちは不信仰と戦うのです。

## ■イエスをキリストと信じるか

「そのころ、エルサレムで、宮きよめの祭りがあった。時は冬であった。イエスは、宮の中で、ソロモンの廊を歩いておられた。それでユダヤ人たちは、イエスを取り囲んで言った。「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。もしあなたがキリストなら、はっきりとそう言ってください。」イエスは彼らに答えられた。「わたしは話しました。しかし、あなたがたは信じないのです。わたしが父の御名によって行うわざが、わたしについて証言しています。しかし、あなたがたは信じません。それは、あなたがたがわたしの羊に属していないからです。」(ヨハネ 10:22-26)

ユダヤ人は、旧約聖書に預言されている救い主の到来を信じ、待ち望んでいました。「キリスト」はギリシャ語で、ヘブライ語の「メシヤ(油注がれた者、救い主)」のことです。現代では「キリスト」と言えば「イエス・キリスト」を指しますが、この時代はまだそうではありません。だから、人々は「あなたが約束されたメシヤならそう言ってください」と頼んでいるのです。

それに対してイエス様は、「何度も説明してきたけれど、あなたがたは私がキリストだと信じない」と言っています。イエス様がわざを見せても、彼らは疑い、信じることをしませんでした。人は、結局自分が信じたいようにしか信じないのです。それは、彼らが「私の羊に属していないから」と、イエス様は言うておられます。「わたしの羊に属する」とは、神の呼びかけに応答することです。この応答は潜在意識の中でなされるので、私たちはいつ応答したか自分ではわかりません。しかし、応答すると、イエス・キリストが信じられるようになります。それは、神の呼びかけに応答することによって、永遠のいのちをもつようになるからです。

私たちの肉のからだは、やがて朽ち果てます。永遠のいのちを持つとは、霊のからだを持つことです。肉のからだは肉の世界に属しているので肉の世界の情報しか収集できませんが、肉のからだの下に内なる人を着て、霊のからだを持つようになると、それは神の国に属するので、神の国の情報を収集できるようになります。そうすると、イエス・キリストを信じることができるようになるのです。

「わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」(ヨハネ 10:27-28)

聖書は、永遠のいのちについて常に現在形で書いています。つまり、「私はすでにあなたに永遠のいのちを与えていますよ」ということです。神の羊となったから、神の言葉を聞き分けられるのです。つまり、信じている人は皆、すでに永遠のいのちを持っています。神を信じ良い生き方ができたら、ごほうびとして永遠のいのちを受け取るのではなく、私た

ちはすでに永遠のいのちを受けとって天国にいるのです。永遠のいのちを持っているので、肉体が減びるとこの世の拘束から解放されて、神の国だけで生きることができるようになります。

### ■三位一体の神

「わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。わたしと父とは一つです。」

(ヨハネ 10:29-30)

私たちの救いは、行いによるものではなく、信仰によるものです。救いはすでに決定されていますから、今後の行いで、救いが取り消されるようなことは絶対にありません。永遠のいのちを奪い去ることは誰にもできないのです。

たとえ確信が持てなくても、このことを信じるのが大切です。神のことばがなかなか信じられない時には、宇宙のことを考えてみましょう。神を認識できない私たちのために、神は、人間にはとてもとらえきれないほど大きな宇宙をお造りになり、神の大きさを示しておられます。自分にはわからなくても、神のことばだから信じるという姿勢が大切です。

三位一体は、そもそも人には理解できないものです。信仰とは、自分が認識できないことであっても、聖書がそう教えているなら真実だと受け入れることです。人は真実を見ることができません。誰もが地球は平らだと思っている時代があり、誰もが星が動いていると思っている時代がありました。今、その認識は間違っていると理解できるようになりましたが、だからといって、すべてを正しく認識できるようになったわけではありません。宇宙はどこにあるのか、空間とは何か、私たちは何一つわかっていません。真実は神にしかわからないのです。それを謙虚に受け止めることが大切です。その神が、父とわたしは一つだと言うのですから、それが真実なのです。

「ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。イエスは彼らに答えられた。「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」ユダヤ人たちはイエスに答えた。「良いわざのためにあなたを石打ちにするのではありません。冒涇のためです。あなたは人間でありながら、自分を神とするからです。」(ヨハネ 10:31-33)

イエス様の言葉を聞いて、ついにユダヤ人たちの怒りが爆発しました。「目の前にいる男が神であるはずがない」というのは、確かに私たちの認識能力では常識です。しかし、私たちは、水槽の中で飼われている金魚のように、地球の中において、この世界の中のことしかわかりません。「神は間違っている」と神のなさることに文句を言う前に、真実が見えているか否か、私たちは自分の認識能力を疑うべきです。

## ■神のわざを信じよ

「イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、『わたしは言った、おまえたちは神々である』と書いてはいないか。もし、神のことばを受けた人々を、神々と呼んだとすれば、聖書は廃棄されるものではないから、『わたしは神の子である』とわたしが言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が、聖であることを示して世に遣わした者について、『神を冒瀆している』と言うのですか。もしわたしが、わたしの父のみわざを行っていないのなら、わたしを信じないでいなさい。しかし、もし行っているなら、たとえわたしの言うことが信じられなくても、わざを信用しなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしが父に在ることを、あなたがたが悟り、また知るためです。」(ヨハネ 10:34-38)

イエス様が奇蹟を行う目的は、私たちが神のことばを信頼できるようになるためです。ご利益のためではありません。神様は、私たちの信仰を励ますことにならなければ、奇蹟を起こしません。神様はあなたの信仰を励ますために奇蹟を行うこともあるし、祈ったからこそ沈黙する場合もあるということです。神様は、一人一人と向き合い、個別に判断してください。

そのため、私たちは「祈っても聞かれない」と感じるがありますが、祈りが聞かれないことで信仰が励まされた代表はパウロです。パウロは自分の病気をいやしてほしいと何度も祈りましたが、いやされませんでした。それは、いやされないことによって、自分の弱さを確認し、神の恵みを深く知ることができるからです。パウロはこのことに気づき、さらに信仰が励まされる結果になりました。

すべてのことの目的は信仰を励ますことにあります。祈っても、なぜすぐに助けてくれないのかと疑問に思ったら、神様はそれを通して自分の信仰を励まそうと訓練しておられるのだと理解しましょう。

「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」(ヘブル 12:11)

神様は私たちに、どんな時も平安で幸せに生きてほしいと願っておられます。それは、お金や健康などの見えるものによって平安を得るのではなく、神のことばを信じることによって得られる平安です。神は私たちを愛しておられるからこそ、この平安な義の実を結ばせたいと願って訓練なさるのです。何が起こっても、神様を信頼して祈り続け、神の言葉を信じる平安を獲得しましょう。

「そこで、彼らはまたイエスを捕らえようとした。しかし、イエスは彼らの手からのがれられた。」(ヨハネ 10:39)

ユダヤ人たちはイエス様を捕えようとしたのですが、まだその時ではなかったため、イエス様は彼らから逃げました。すべてのことに時があり、すべてのことに意味があり、神はすべてを益としてくださると聖書は教えています。冬の間、木々は枯れたように見えますが、その間に栄養を蓄えて成長しています。今、コロナの影響で苦しい時期が続いていますが、春に向けて飛躍するための土台を築いていきましょう。

## ■なぜ彼らは信じることができたのか

「そして、イエスはまたヨルダンを渡って、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた所に行かれ、そこに滞在された。多くの人々がイエスのところに来た。彼らは、「ヨハネは何一つしるしを行わなかったけれども、彼がこの方について話したことはみな真実であった」と言った。そして、その地方で多くの人々がイエスを信じた。」

(ヨハネ 10:40-42)

ヨルダン川を渡った先では、多くの人がイエス様を信じました。なぜ彼らは信じることができたのでしょうか。

信じるとは、自分の認識を捨てることです。自分は正しいと思う人は、神のことばを受け入れることができません。困難に出会い、自分の弱さと向き合ったとき、人は初めて自分を捨て、神により頼むことができるようになります。このヨルダン川を渡った地域には、貧しい人が大勢いました。生活の中で困難を覚えることも多く、「もう自分にはどうすることもできない」と、ある意味、自分を捨てるのが容易にできました。イエス様はこのような人を「心貧しき人」と呼んでおられます。「自我に死ぬ」という言い方がありますが、自分を捨てることによって飛躍し、神を信じるに至るのです。

今、世界はコロナウィルスという困難に直面しています。この困難の中、自分を捨て、神を信頼することができるかどうか、これはある意味、自分自身を確認するチャンスです。私たちが戦うべき敵は不信仰です。神を愛するとは、神を信頼することです。それを邪魔するものが不信仰です。自分は正しいと思い込み、神よりも自分を信頼するとき、人は不信仰に陥ります。

私たちは、からだが病気になることを恐れて検査したり健康診断を受けたりしますが、信仰をむしろウイルスである不信仰には無防備になっていないでしょうか。自分の不信仰をチェックするために、聖書は次のような検査キットを教えています。

「人は神のものを盗むことができようか。ところが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのを盗んだのでしょうか。』それは、十分の一と奉納物によってである。あなたがたはのろいを受けている。あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。この民全体が盗んでい

る。十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。——万軍の【主】は仰せられる——わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」(マラキ 3:8-10)

聖書は、「神を試みるな」と教えていますが、この献金に関してだけは、「試してみよ」と教えています。神のものを神に返す、それによって祝福を受けるかどうか試してみよと言うのです。神を信頼し、心が神に向いているかどうか、その信仰は献金に表れます。なぜなら、あなたの富のあるところにあなたの心もあるからです。もしあなたに収入があるならば、その十分の一を神に返すことで、不信仰と戦うことができます。困難な時代ではありますが、今一度、神のことばを信じて一歩を踏み出すチャレンジをしましょう。不信仰と戦い、神の恵みを確認できれば幸いです。